【土木計画学研究・論文集 No.7 1989年12月】

過疎問題と過疎地域の地域イメージに関する基礎的研究

A Study on Depopulation Problems and Regional Image in Depopulated Areas

折田仁典
By Jinsuke ORITA

This paper aims to define the intricate depopulation image which consists of several complicated factors. Because, to the author's knowledge, image on depopulated areas interrupts the possibility of its future development. In this paper, Semantic Differencial method and DEMATEL method are applied to analyze depopulation image and depopulation problems. Finally, in order to create a plan to counter depopulation problems, measures based on those results are recommended.

1．はじめに

昭和４０年代前半頃から社会問題化した過疎地域に対して、今日までの約２０年間、過疎債等の財政上の特別措置、地方税の免除等の税制上の特別措置、さらには基幹道路の整備、医療の確保等、諸々の対策が講じられてきた。しかしながら、問題の根本的解決までにはいたらず、全国総市町村３２５４のうち１１５７の市町村が過疎法による過疎地域指定を受けている現状（平成元年４月１日現在）を鑑みるに、この問題の解決の困難さがうかがえる。

さらに今日では、過疎問題と言われる諸問題に、従前の人口減少などの問題に加え、新たに高齢化という問題も現出し、社会の高度化、複雑化、人間の価値観の多様化と相まって、より一層複雑化し、実態のわからないものとなってきた。とくに、人間の価値観の多様化は物事に対するイメージの概念の重要性を助長させたが、このことは過疎地域に新たな課題をもたらした。すなわち、地域イメージが一因となっている嫁不足、若者の地元からの流出、さらには地域活性化への意欲の阻害などの諸問題である。この地域イメージの改善のために多くの過疎地域では、各種イベントの企画、特産物の開発、観光・レジャー開発など涙ぐましい努力を払い、地域イメージの向上を図っている。[1]

ところで、このような過疎地域イメージの改善方策を模索する場合には、まず第一に過疎地域のイメージとはどの様なイメージかを明らかにし、さらにこのイメージはどの様な過疎問題と関連性を持つのかを把握しておく必要がある。当然のことながら、このとき過疎問題とは何かを明確化しておくことは言うまでもない。また、過疎地域は地域構造により地域特性が異なるから、可能ならば地域構造を考慮した形で地域イメージおよび過疎問題が整理できれ

＊正会員　工修　秋田工業高専助教授　土木工学科
（〒011 秋田市飯島文京町１－１）

ば、今後の過疎地域計画策定に際し、非常に有効となる。それは問題の明確化が問題解決のための最適行動選択へと連ながって行くからである。

本研究はこのような観点から、過疎地域のイメージを具体的な過疎問題と関連させながら明確化するものである。

2．過疎問題及びイメージ分析に関する既往研究

（1）過疎問題に関する既往研究

過疎現象、過疎問題あるいは過疎対策など「過疎」に関する調査、研究は従来から多くの研究分野で行われてきた。研究対象項目も過疎の概念、交通、定住意識など多岐にわたっている。しかしながら、これらはいずれも個別の過疎問題を解析対象とした研究であり、その問題が地域全体における「過疎問題」の中で、どういう位置づけにあるかといった議論、あるいは他の過疎問題との定量的な関係分析といった研究例は少ない。また過疎地域のイメージを過疎問題から検討、分析しようとする調査、研究の試みもきわめて少なく、地域イメージの悪さが過疎地域にとって重大なことであると言及したものには安達などを含めて数例がみられる程度である。安達は「農家の生活、町村機構を巡る物的条件の悪化に加えて、地域社会衰退イメージによる意識の衰退が相乗されたとき、むら社会崩壊のメカニズムがうごきだしたとみる」と述べ、さらに「このイメージを打破する対策が出されないと問題は解決されないだろう」と指摘している。[2] しかしながら、この論文は過疎イメージの打破の重要性について指摘した点では先駆的研究として評価できるが、具体的にどのようなイメージなのか、またどのような物的条件の悪化によって地域社会衰退のイメージが形成されるのかなどについては言及しておらず、定量的分析も行われていない。以上のように、過疎地域の振興のためには、過疎イメージの改善は重要な課題であるにもかかわらず、その分析は未だ充分とは言い難い。

（2）イメージ分析に関する既往研究

景観あるいは都市イメージなど、心理的研究で解析対象とする心理的空間には、具体的な空間を視覚的に把える「知覚空間」と具体的空間を前提にせずに、その記憶、印象による「印象空間」とがある[3]。「知覚空間」を対象とした研究では、松浦、島谷の都市河川のイメージ分析などが、[4] また、「印象空間」を取り扱った研究としては、上田、瀧野らによるへき地のイメージ分析などがみられる。[5] 本研究は、過疎イメージとは何かを探ることを目的としているため、後者の「印象空間」を解析対象空間とすることになる。

上述のように、イメージに関する研究例は多くみられるが、いずれの研究も計画の方向性は示唆されているものの、具体的計画の段階ではあいまいな点が多い。本研究では、この点に留意することにより具体的な計画と結びつくように配慮し、過疎イメージの把握と同時に、具体的な過疎問題との関係を地域構造を踏まえながら分析することとした。

3．調査及び解析方法の概要[6),7)]

（1）調査

調査は過疎問題の明確化（本研究では問題の構造化と呼ぶことにする）及び過疎地域のイメージ分析に用いる資料収集のための本調査、本調査に用いる調査票構築のための予備調査に大別される。

（2）予備調査

a）過疎問題設定のための予備調査

まず、過疎地域において現実にどのような問題が存在しているかを客観的に把握し、かつどのような問題を過疎問題として分析するかを明確にしておかねばならない。そこで、本調査を実施する前に過疎地域タイプの異なる３地域（秋田県琴丘町、増田町、東成瀬村）において、地域の人々が過疎現象、過疎問題などについて、どのような考え方、イメージを持っているかを中心に、ヒヤリング調査を実施した。被験者は役場の人（琴丘町、増田町各１０名）、成人式に出席した若者達（東成瀬村５０名）で、調査は昭和６２年８月に行った。このまとめにはＫＪ法を用い、幾つかの過疎問題を抽出した。さらに過疎問題に関する既往研究からも問題を抽出し、分析に用いる２４項目の過疎問題（以降、評価要因と呼ぶ）を設定した。（表１、図４参照）

b）過疎地域のイメージ分析のための予備調査

過疎地域のイメージ分析には、言語心理学の分野でオスグッドらによって考案された評定法の一種であ

るＳＤ法（Semantic Differential Method）を適用する。この方法は正反対の意味をもつ形容詞対（例えば、「良い－悪い」）で作られた両極評定尺度を用いることにより、コンセプト（評定対象）が内含する情緒的意味を測定することができる。このＳＤ法に用いるコンセプト及び過疎イメージ評価尺度の設定のため、予備調査を実施した。調査対象地域、被験者ともに過疎問題設定のための予備調査の場合と同様である。ここでは、「″過疎″という言葉を聞いてどのようなイメージをもちますか」という質問を行い、連想できる言葉を５個以上回答させ、これをＫＪ法でまとめた。この結果、過疎イメージを創造することに深い関係を持つと考えられるコンセプトとして次の項目が選択された。

① 公共・生活施設 ② 公共交通 ③ 産業 ④ 人間性 ⑤ 自然環境 ⑥ 道路施設 ⑦ 地域の中心地（商店街）

これらのコンセプトの他に、地域全体のイメージを把握するため、「地域全体」というコンセプトも付加した。過疎イメージの評価尺度の設定では、上記調査の他に既存の研究からも検討し、まず１００対の形容詞を選定した。これを５０名の被験者（秋田高専学生）に対して対極性確認調査を実施した。さらに、形容詞間の類似性、形容詞のもつ意味などからも検討を加え、できるだけ価値判断を含む形容詞を選定した。これは過疎地域のイメージを「良いイメージ」なのか「悪いイメージ」なのか判断したかったからである。この結果、各コンセプトに共通した１２の形容詞対を設け、さらにそれぞれのコンセプトに特に関係あると思われる形容詞対３～７個付加した。（図２，３参照）

（３）本調査

ａ）過疎問題構造化のための調査

調査は昭和６２年１１月、秋田県内過疎法指定の32の過疎地域で実施した。問題の構造化にはＤＥＭＡＴＥＬ法を適用したが、この手法はその特徴から、調査の被験者は、過疎問題に精通した人が望ましい。本調査の場合は各市町村において過疎対策に従事している人、または企画担当課長に対して郵送による方法で行った。調査内容は各評価要因に対し、①その評価要因が現実に問題となっているかどうか（問題となっていないと回答すれば、次の評価要因に質問が移る）もし問題となっていれば ②その評価要因は将来的にみてどの程度重要性を増してくるか、さらに後述の影響度、被影響度の算出のために ③その評価要因は他のどの要因に直接影響を及ぼしているか、またその程度は などとなっている。

ｂ）過疎地域イメージ調査

調査対象とした過疎地域は秋田県雄和町、増田町および東成瀬村の３地域である。調査は昭和６２年１２月（増田町、東成瀬村対象）及び６３年８月（雄和町対象）に、３地域の住民を対象に役場および中学校に依頼して実施した。調査項目は設定したコンセプトに対するイメージ、過疎問題（構造化分析に用いたと同じ２４項目）と「過疎」との結び付きの程度などである。解析に用いたサンプル数は、雄和町１０４票（男４８、女５６）、増田町７８票（男３３、女４５）、東成瀬村９１票（男３２、女５９票）である。

（４）ＤＥＭＡＴＥＬ法

ＤＥＭＡＴＥＬ法（Decision Making Trial and Evaluation Laboratory）は、社会現象に対する個々の人間の意識や判断を統計的に調査し、これを評価する社会調査法であり、港湾計画[8]、都市施設配置計画[9]などに適用されてきた。この手法は、複合化された問題の構造を階層的に図示できる、各要因間の関連度を定量的に分析できるなどの特徴を持っている。分析では、まずアンケート回答者に要因間の直接影響の大きさを質問する。本研究の場合は、５段階尺度（影響がない場合を０、最大の影響がある場合を４）とした。この回答結果から得られるのが直接影響行列である。各回答者は各要因間の直接影響の大きさのみを回答しているが、実際には互いに他の影響を介して影響するという間接影響も存在する。そこで、多段階に及ぶ間接影響の全体間接影響行列を求める。そして、これらの直接影響及び間接影響行列を加えることによって総合影響行列が算出される。ここで、各要因の影響度は総合影響行列の行和、被影響度は列和で表され、重要度は影響度と被影響度を加えることによって求められる。

本研究では、評価要因の重要性を見るために重要度、他の評価要因への影響を見るために影響度の２側面を中心に、これらの構造を図示することにより考察を加えた。

4．過疎地域のタイプ分類[10]

過疎地域は地域機能の集積度合及び交通流動性などによって概ね次のような3タイプに大別できる。

（1）都市近郊型過疎地域

都市あるいはそれに準ずる高い機能集積を持つ地域の圏域に内含され、これらの地域への依存性が強い。地域機能の集積は乏しく、他地域からの通勤・通学者吸引力は低いが、地域外への通勤・通学者数は多いため交通流動性は高い。（以降、都市近郊型と略称する）

（2）地域間接続型過疎地域

都市あるいはそれに準ずる高い機能集積を持つ地域と閉鎖型過疎地域との接続的役割を果たしている。地域機能の集積は低いが、この地域に依存する地域があるため通勤・通学者吸引力は高く、交通流動性も高い。（以降、接続型と略称する）

（3）閉鎖型過疎地域

都市あるいはそれに準ずる高い機能集積を持つ地域の圏域に内含されず、機能集積はきわめて乏しい。他地域からの通勤・通学交通量の吸引力もなく、さらに交通流動性も低く、閉鎖性が強い。（以降、閉鎖型と略称する）

5．過疎地域のタイプと過疎問題の関連性

過疎問題の構造化分析では、まず、過疎問題には一般性があるのか、あるいは地域構造別に顕著な差が存在するのかという視点に立ち、都市近郊型（5地域）、地域間接続型（4地域）、閉鎖型（17地域）の3地域群について行った。次いで、さらに詳細な特性を把握するために、26地域個別の構造化も試みた。

（1）重要度からの分析

重要度から3地域群の過疎問題の構造特性を見ると、生まれ育った地域で一生生活するという観念が薄れ長男でさえも豊かな生活を求めて他地域へ流出する「定住意識の変化⑯」は、いずれの地域群においても重要度が最も高い。また、個別の地域でみても、26地域中18地域で一番重要度が高く、さらに25の地域で重要度80％（最も重要度の高い要因を100とした場合の比率）以上となっている。次いで重要度が高いのは、評価要因①、②、③の就労に関する問題及び⑰の嫁不足の問題などである。これらの諸問題は地域構造による顕著な違いはみられず、いずれの地域群、個別の地域単位においても重要度大として現出している。すなわち重要度大なる諸問題については、大部分の過疎地域で認識が一致しており、過疎問題として一般性が存在すると言えよう。

（2）影響度からの分析

影響度について、地域群で分析したところ、図1に示すように地域構造により特徴がみられた。すなわち、3地域群とも「高速交通体系の未整備⑮」を最も影響度が大としているが、次に影響度大なる問題として、都市近郊型、接続型では「拠点都市整備の立ち遅れ⑪」が閉鎖型に比べ、上位に位置する。一方、閉鎖型ではこの問題より、就労に関する問題の方が上位であり、さらに「嫁不足の問題⑰」も上位に位置して「定住意識の変化⑯」に影響している。このような過疎タイプによる影響度の違いは、「拠点都市」に関しては閉鎖型では地域の核となっている地域の圏域に内含されていないために「拠点都市」への意識よりも「企業誘致」「雇用の場」による就労条件の方がより「定住意識」に影響すると認識しているためと思われる。一方、他の2地域群は地域の核に依存しているため、自地域の「就労条件」へ「拠点都市」が介在し、「定住意識」へ影響すると考えているからであろう。

6．過疎地域のタイプと過疎イメージの関連性

（1）過疎イメージ

地域構造別に各コンセプトについて、被験者が評定したスコアの平均を用いて過疎イメージの分析を行ったところ、次のようであった。

a）公共・生活施設

評定スコアに地域差が顕著に現れるコンセプトである。接続型及び閉鎖型でのイメージは全般に悪く、かつ非常に類似した傾向を示したが、都市近郊型においては全ての形容詞対で評定スコアはプラスの値となり、公共・生活施設に対するイメージは他の2地域に比べて良い。なお、公共・生活施設に対する不満などが表現されている言葉、すなわち悪いイメ

ージとして「さみしい」、「不便な」、「テンポがおそい」などが挙げられる。（図２）

b）公共交通

このコンセプトにおけるイメージは３地域とも、ほぼ同じ傾向にあり、かつそのイメージは悪い。一般に、過疎地域における公共交通のサービス水準は低いといわれているが、この結果を見るとその現状のイメージが如実に現れているようである。特に悪いイメージを表現する言葉としては、「不便な」、「活気がない」、「テンポがおそい」などである。

c）産業

公共交通の場合と同様に、３地域ともにイメージは悪く、過疎地域における産業の乏しさがうかがえる。この悪いイメージを表現する言葉としては、「テンポがおそい」、「魅力がない」、「保守的な」などである。

d）人間性

都市近郊型では２、３の形容詞対をのぞき、プラスの評価であり、他の２地域も前述のコンセプトとほどイメージは悪くない。人間性において、とくに良いイメージは「まとまりのある」、「親しみやすい」であるが、反面、３地域ともに悪いイメージとして「テンポがおそい」、「消極的な」、「保守的な」とも表現している。他の調査あるいは行政レベルから「人間性はよいが物事に対する積極性に欠け、保守的であり、発想の転換が必要である」と県民性、地域性を指摘する声が従来からあったが、この分析におけるイメージは、この指摘を証明することとなった。

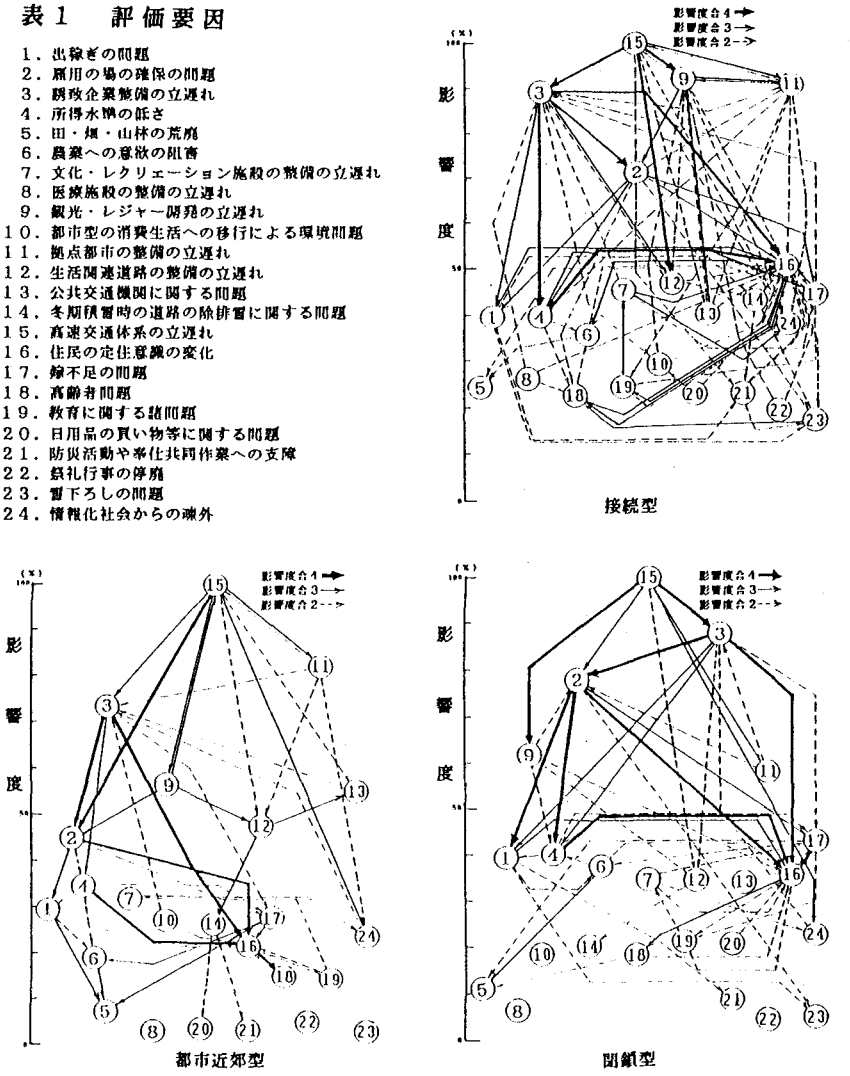
e）自然環境

設定したコンセプトの中では最もよいイメージであった。地域別では都市近郊型でのイメージが最もよいが、地理的、自然的にも厳しい環境にあると思われていた閉鎖型においても「さびしい」という面はあるものの「親しみやすい」、「のびのびした」、「生き生きした」などのよいイメージを持っている。

f）道路施設

表１　評価要因

1．出稼ぎの問題
2．雇用の場の確保の問題
3．誘致企業整備の立遅れ
4．所得水準の低さ
5．田・畑・山林の荒廃
6．農業への意欲の阻害
7．文化・レクリエーション施設の整備の立遅れ
8．医療施設の整備の立遅れ
9．観光・レジャー開発の立遅れ
10．都市型の消費生活への移行による環境問題
11．拠点都市の整備の立遅れ
12．生活関連道路の整備の立遅れ
13．公共交通機関に関する問題
14．冬期積雪時の道路の除排雪に関する問題
15．高速交通体系の立遅れ
16．住民の定住意識の変化
17．婦不足の問題
18．高齢者問題
19．教育に関する諸問題
20．日用品の買い物等に関する問題
21．防災活動や奉仕共同作業への支障
22．祭礼行事の停滞
23．雪下ろしの問題
24．情報化社会からの疎外



注１）矢印は直接影響を表し，線の太さは影響度の強さを示す。
注２）各要因の上下関係は一連の要因の内，影響度の高いものほど上に位置し（最も影響度の高い要因を１００％としたときに，他の評価要因はどれだけの影響度を持っているかを表している）左右関係は特別の意味を持たない。

図１　地域構造別影響度による平均構造

都市近郊型では多くの形容詞対で評定スコアの値が「どちらともいえない」付近に位置しているが、他の２地域においては、総じてイメージはよくない。これらのイメージを表現する言葉としては、「テンポがおそい」、「きゅうくつな」、「貧しい」が挙げられる。

ｇ）地域の中心地（商店街）

公共・生活施設と同様に、都市近郊型では良いイメージ、接続型、閉鎖型では著しくイメージが悪いという地域差の出たコンセプトである。悪いイメージの代表的な言葉は、「保守的な」、「テンポがおそい」、などであるが、これらの言葉からは、都市化が農山村地域に押し寄せたとは言うものの、未だ旧態依然とした商店街の形成が続いている現状が容易に想像される。

この分析における被験者の大部分が自分の住んでいる地域を程度の差はあれ、「過疎」と認識していることから本研究では分析で得られた各地域のイメージの中で３地域に共通して悪い形容詞（例えば、テンポがおそい、保守的な、老けたなど）を「過疎を表現する言葉として認識することとした。ここで過疎イメージを整理すれば、次のようである。

過疎のイメージはやはり悪いイメージが強く、そのイメージは「老けた」、「さみしい」、「暗い」などの言葉で表現できる。評価としては「魅力がなく」、「不便」であり、全体的には「保守的」で「テンポがおくれている」地域と言える。

地域構造別では概して都市近郊型が他の接続型、閉鎖型よりイメージは良いが、地域の「公共交通」、「産業」はいずれの地域においてもイメージは悪い。

ｈ）地域全体

理論的には、このコンセプトには居住している地域の諸条件から複合形成されるイメージが現れるはずである。分析結果を見ると、都市近郊型では良いイメージ、一方の接続型、閉鎖型では悪いイメージ、かつ接続型および閉鎖型では非常に類似しているという「公共・生活施設」、「中心地（商店街）」と同様の傾向を示した。このことは、地域をイメージするときは地域の人間性、自然環境などのイメージも影響していると思われるが、特に公共・生活施設、中心地（商店街）の充足度が強く地域イメージの形成に影響しているものと思われる。なお、地域イメ

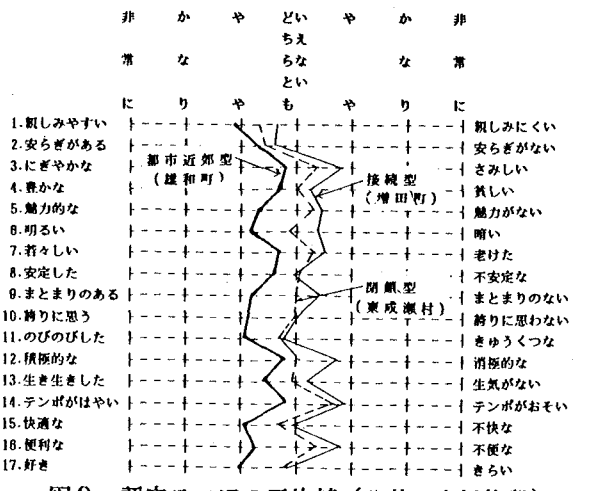


図２　評定スコアの平均値（公共・生活施設）

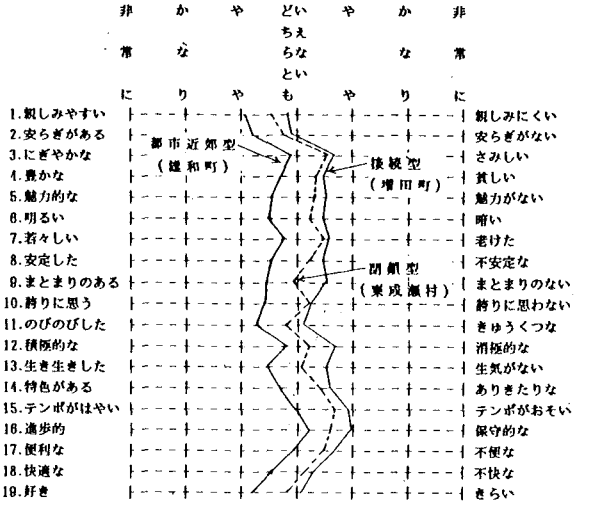


図３　評定スコアの平均値（地域全体）

ージの悪い接続型、閉鎖型でも、地域住民は「親しみ」と「安らぎ」を持っており、どちらかと言えば「好き」と評価している。（図３）

（２）過疎認識と過疎問題

接続型、閉鎖型両地域では「自然環境」、「人間性」をのぞいた全てのコンセプトでイメージが悪く、また、これら２地域に比べイメージが良かった都市近郊型においても「公共交通」、「産業」、「道路施設」などではイメージはあまり良くなかった。そこで過疎イメージをより具体的に明らかにするため、設定した２４項目の過疎問題との結び付きの度合を分析した。これはどのような過疎問題を意識して「過疎」を認識しているかを把えるためである。ここでは、まず居住している地域をどの程度「過疎」だ

と認識しているかを質問し、さらに、過疎問題がどの程度、「過疎」と結び付くと思っているかを「極めて結び付く」、「かなり結び付く」、「やや結び付く」、「結び付かない」の4段階の評価尺度で質問した。次いで、これらの過疎問題のイメージを知るため、コンセプト「地域全体」の形容詞対の評定スコアと過疎問題との結び付きの強度（3、2、1、0）を用い、相関係数を求めた。図4はこれらの分析結果を示したものである。この図によれば、自分の居住している地域が「非常に過疎だ」と思う人ほど「過疎」と実際の過疎問題との結びつきが強く現れていることがわかる。結びつきの強い問題としては「働き口が少なく職業が自由に選べない②」、「所得が低い④」、「嫁がこないので未婚男性が多い⑰」などであるが、これらの諸問題は日常生活を支える最低限の条件であるため、特に強く意識するものと思われる。また、高速交通体系、公共交通などの交通問題⑮⑱、公共施設としての「医療施設整備の問題⑧」などとも強く結びついており、前述の分析でイメージの悪かったコンセプト「産業」、「公共交通」、「公共・生活施設」（都市近郊型を除く）と合致する。これらに結果を見ると、過疎地域では、職業選択に不自由し、所得は低い。さらに医療、教育に問題があり、交通整備は未だ不十分で、嫁不足に悩んでいる。過疎のイメージはこのような諸問題、すなわち、地域の産業、交通、公共・生活施設の未整備が起因して形成され、そのイメージは前述のとおりである。

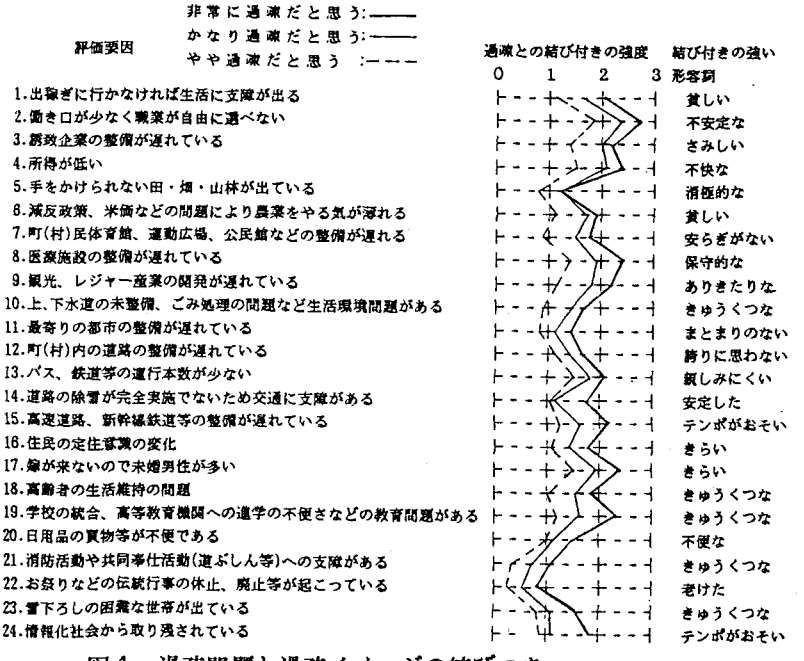


図4　過疎問題と過疎イメージの結びつき

7．過疎問題の構造と地域イメージ

過疎問題の重要度には極端な地域差はみられず、

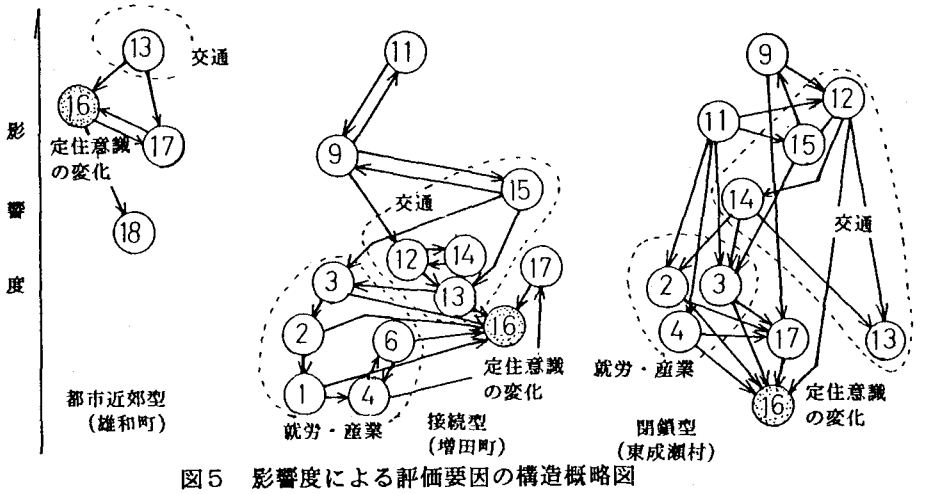


図5　影響度による評価要因の構造概略図

どちらかといえば一般性があった。しかしながら、地域イメージは地域構造によって差異があった。そこで過疎地域のイメージには過疎問題の重要度より、影響度あるいは他の問題との因果関係の方が影響していると考え、これらに着目して過疎地域イメージとの関連性を分析した。

図５は都市近郊型（雄和町）、接続型（増田町）、閉鎖型（東成瀬村）についてＤＥＭＡＴＥＬ法により構造化した影響度に関して、その概略を示したものである。図の矢印は、最も影響度大なる評価要因を出発点に、最終目標とも言うべき住民の「定住意識の変化⑯」をゴールとして評価要因間の影響ルートを示すものである。これを見ると、都市近郊型ではイメージ分析でとりわけ悪いイメージの強かった公共交通機関に関する問題が最も影響度が大で、この問題が大きく定住意識に影響する構図となっている。また接続型では「拠点都市整備の問題⑪」を出発点として多くの評価要因を介して定住意識に影響しているが、介在する評価要因は概略、就労と交通問題である。これらもまた、悪いイメージの強かったコンセプトであり、表現する言語としては、図４からも「テンポがおそい」、「さみしい」、「貧しい」が抽出される。閉鎖型では、前述した２地域ほど影響度は強くないが高速交通体系整備の立ち遅れからやはり就業、雇用の問題を経て定住意識に影響し、これらを表現する言葉としては接続型と同様に「テンポがおそい」、「さみしい」、「不快な」が選択される。

以上の分析結果を見ると、定住意識に影響を及ぼす評価要因が過疎地域イメージに大きく影響し、さらにこの影響度及び影響ルートがイメージの地域差となって現れるものと思われる。

８．まとめと課題

本研究は過疎地域における地域の活性化、振興といった側面に多大なるマイナスの要因となっっている「過疎イメージ」を明らかにし、さらに具体的な過疎問題との関連性を追求したものである。分析では概ね過疎地域イメージおよびイメージと関わりのある過疎問題を絞り込むことができるなどの成果が得られた。主な結果は次の通りである。

①過疎地域のイメージは都市近郊型でやや良いイメージにあるものの、接続型、閉鎖型では悪い。過疎地域のイメージの悪さは「公共交通」、「産業」のイメージの悪さと深い関わりがあり、地域イメージの差異は「中心地（商店街）」、「公共・生活施設」のイメージの評価と関係していると思われる。

②過疎地域イメージは「老けた」、「さみしい」、「暗い」などの言葉で表現でき、「魅力がなく」、「不便」ではあるが、「親しみ」があり、「好き」と評価している。全体的には、「保守的」で「テンポが遅れている」地域と言える。

③過疎問題の重要度は地域構造に関係なく認識は一致しており、一般性がある。しかし、影響度、影響ルートには地域差があり、このことが地域イメージと関係しているようである。すなわち、都市近郊型では公共交通、接続型、閉鎖型では交通条件、就労条件が、究極的目標とも言える住民の定住意識に影響するとしており、これら諸条件のイメージは前述のイメージ分析の結果とほぼ一致する。

本研究における分析は過疎地域イメージ分析の出発点に過ぎず、今後さらに詳細な検討が必要である。今後の課題としては、より具体的に過疎地域イメージを把えるために、抽出された過疎問題の詳細な分析および過疎地域イメージと過疎問題との関連性をより定量的に分析する手法の追求などが挙げられ、今後も検討を加えていきたいと考えている。最後に有益なご示唆をいただいた秋田大学清水浩志郎教授に感謝の意を表する次第です。

参　考　文　献

1）例えば、１９８７年１２月９日毎日新聞秋田版
2）安達生恒：過疎地帯における営農と生活、地上、昭和４２年６月号PP４２～８１、１９６７
3）久隆浩：居住地に対するイメージ調査と満足度調査の比較、第１９回日本都市計画学会学術研究論文集、PP１８７～１９２、１９８４
4）松浦、島谷：都市河川イメージの評価と河川環境整備計画、土木計画学論文集NO.４、PP２０５～２１２、１９８６
5）上田、瀧野他：ＳＤ法で測定されたへき地のイメージ、奈良教育大学教育研究紀要１６、PP１４９～１５４、１９８０
6）折田、清水：ＤＥＭＡＴＥＬ法による過疎問題の構造化に関する基礎的研究、第２３回日本都市計画学会学術研究論文集、PP２８９～２９４、１９８８
7）折田、清水：ＳＤ法による過疎イメージの構造分析、土木計画学研究講演集１１、PP７１５～７２２、１９８８
8）湯沢、須田：港湾計画に対する住民意識構造に関する調査研究、土木計画学研究発表会講演集４、PP１～６、１９８２
9）定井、渡辺：ＤＥＭＡＴＥＬ法による都市施設の物流特性に関する研究、第３６回年講第４部PP２８５～２８６、１９８１
10）折田、清水：過疎地域における地域構造分析、土木計画学研究発表会講演集５、PP１８４～１８９、１９８３